

【4】 ピンドーラ・バーラドヴァージャ

〔0〕 前節においては、ウデーナ王をはじめとするコーサンビー王室の人々と仏教との係わりを見てきた。そのなかでピンドーラ・バーラドヴァージャ (Piṇḍola-bhāradvāja) はウデーナ王を仏教に導いた人物として登場した。ただしウデーナ王が仏教に帰信したのは王妃の1人であったサーマーヴァティータによるとする資料もあり、そのどちらを取るべきかを検討しなければならないし、王とピンドーラが初めて接触したその時期も明らかにしておかなければならない。またピンドーラは釈尊よりも前にコーサンビーに仏教をもたらしたという可能性もないではないであろう。

そこで今節では、ピンドーラとコーサンビーの仏教についての資料を調査し、若干の考察を加えたい。なお、ピンドーラの漢訳には、賓頭盧・賓度羅拔囉墮舍などがある。

〔1〕 まずピンドーラに関するA文献資料を紹介し、若干の整理をしてみよう。

〔1-1〕 まずA文献資料を紹介する。紹介にあたっては、経の次に律というような従来の方針に則りつつ、話柄が共通するものを一所にまとめるようにつとめた。

〈1〉 その時世尊はコーサンビー国のゴーシタ園に住されていた。そのとき、ピンドーラ・バーラドヴァージャは悟ったと記別し (Piṇḍolabhāradvājena aññā vyākātā hoti)、生すでに尽き梵行すでに立ち更に後有を受けずと知った。衆多の比丘がその理由を尋ねたところ、世尊は「三根を修習し多修したが故にピンドーラ・バーラドヴァージャは悟ったと記別する。三根とは念根・定根・慧根である」と説かれた。SN. 048-049 (vol.V p.224)

〈2〉 比丘らよ、私の声聞比丘の中で師子吼する者のうちの第一はピンドーラ・バーラドヴァージャである⁽¹⁾。AN. 001-014-001 (vol. I p.023)

(1) その他に、「出家してもっとも久しい者の第一はアンニャコンダンニャである。大慧中の第一は舍利弗である。神通ある者のうちの第一は大目犍連である。頭陀を教える者のうちの第一は摩訶迦葉である。天眼ある者のうちの第一はアヌルッダである。貴族中の第一はバツディヤ・カーリゴダーヤプッタ (Bhaddiya Kāligodhāyaputta) である。妙音者中の第一はラクンタカバツディヤ (Lakunṭaka-bhaddiya) である。説法者中の第一はブンナ・マンターニプッタである。略説を広く分別するもののうちの第一はマハー・カッチャーナである」とされ、ピンドーラはラクンタカバツディヤの後に記されている。

〈3〉 世尊は舍衛国祇樹給孤独園におられた。その時、世尊はさまざまな面での第一比丘を説かれた。……降伏外道履行正法。所謂賓頭盧比丘是⁽¹⁾。『増一阿含』004-003 (大正02 p.557 中)

(1) 賓頭盧の前には004-002において、「馬師・舍利弗・大目犍連・二十億耳・大迦葉・阿那律・離日・小陀羅婆摩羅・羅吒婆羅・大旃延」が挙げられ、004-003の筆頭は「我聲聞中の第一比丘は受籌に堪任して禁法に違せざるものは軍頭婆摩比丘」であって、次に賓頭盧が挙げられ、続いて「疾病を瞻視し醫藥を供給するものは識比丘である。四事に衣被飲食を供養するもの亦識比丘である。能く偈頌を造り如來の徳を嘆ずるものは鵬耆舍比丘である。言論辯了にして疑滯なきものも鵬耆舍比丘である。四辯才を得て難に觸れて答對するものは摩訶拘絺羅比丘である。清淨閑居、人中に樂しまざるものは堅牢比丘である。乞食して辱めに耐え寒暑を避けざるものは難提比丘である。靜坐に獨處して專意念道するものは今毘羅比丘

である。一坐一食して處を移さざるものは施羅比丘である。三衣を守持して食息を離れざるものは浮彌比丘である」とされている。

- 〈4〉世尊は舍衛国祇樹給孤独園におられた。その時世尊は、我弟子中に大聲聞が有るといわれ、次のように説かれた。復た聲聞あり、説法の音師子吼の如きものは、賓度羅拔囉墮舍苾芻である⁽¹⁾。『阿羅漢具徳經』（大正 02 p.831 中）

(1) 他に、「王位を棄捨し久しく出家し最初に悟道梵行第一なるものは憍陳如苾芻である。復た少食にして常に頭陀行を喜持するものは大迦葉苾芻である。復た大辯才を具え智慧第一なるものは舍利弗苾芻である。復た精進を修持し大神通を具えるものは目乾連苾芻である。復た觀囑する所にて大天眼を得たものは阿憍嚧駄苾芻である。復た定慧を具足し多聞第一なるものは阿難苾芻である。復た軌儀を善く解し律藏を能く持すものは優波離苾芻である。復た大衆中に於いて能く妙法を説くものは富樓那彌多羅尼子苾芻である。復た坐臥等の物を悉く皆具足するものは捺羅髒末羅子苾芻である……」とされ、この後に記される。さらにこの後は、「復た經律を善く解して能く論義するものは迦旃延苾芻である。復た佛法において信解第一なるものは末闍哩苾芻である。復た得果を修持し氏族を光顯するものは迦留陀夷苾芻である。復た演説する所にて大妙音を具えるものは跋耆哥苾芻である。復た善く美語を解して能く談論するものは童子迦葉苾芻である。……」と続く。

- 〈5〉世尊は舍衛城祇園におられた。そのときピンドーラ・バーラドヴァージャは釈尊の近くで結跏趺坐していた。彼は阿蘭若住者であり、常乞食者であり、糞掃衣者であり、但三衣者であり、少欲者であり、知足者であり、遠離者であり、他と雑処しない者であり、努力精進者であり、頭陀説者であり、増上心定に専念する人であった。釈尊は彼を見、この義を知られて、「非難することなく、害うことなく、波羅提木叉において防護あり、食において適量を知り、辺地を臥座処とし、増上心に精勤する。これが諸仏の教えである」とウダーナを唱えられた。Udāna 004-006 (p.042)

- 〈6〉ピンドーラ・バーラドヴァージャ長老の2詩句

この生命は、食べなければ生きてゆくことができない。食物は胸を静かならしめるものではない。身体は食物に依存するものであることを見て、私は食を求めに托鉢に出かける。Theragāthā v.123

かれら（修行者）は、良家の人々からつねに受ける礼拝と供養とは、汚泥のようなものであると知っているからである。細かな矢は抜き難い。凡人は（他人から受ける）尊敬を捨てることは難しい。v.124 (p.018)

- 〈7〉王舎城の長老が大きな栴檀の木を得た。長老はこれで木鉢を作らせ、竹竿の天辺に括り付け、「神通力で取った者に施す」と言った。六師外道たちがやって来て試みた。そのとき托鉢にやってきたピンドーラ・バーラドヴァージャも目連のためにと試み、その木鉢を取った。人々は「鉢を取った」と大声を出しながら彼の後に随った。この声を聞いた釈尊は、阿難に理由を尋ねられた。阿難は彼が神通力をもちいて鉢を取ったことを告げた。釈尊は彼を呼び寄せて呵責され、比丘らに「在家人に神通力を示してはならない」、「木鉢を持つてはならない」と制せられた。Vinaya「小事毘度」(vol.II p.110)

- 〈8〉世尊は王舎城におられた。そのとき外道六師があり、時に長老があつて六師の弟子であった。長老は栴檀で鉢を作り、高いところに掲げて、「阿羅漢にして神通力ある者は取れ」といったが、彼らは取れなかった。そのとき賓頭盧は目連に「世尊はあな

- たは神足第一であると記されたのであるから、これを取れ」といった。目連は賓頭盧に「私は白衣の前で神足を現したことはない。世尊はあなたも大神力があり、師子吼第一と記されたのであるから、あなたが取れ」といった。そこで賓頭盧がこれを取った。世尊は「在家人の前で神通力を使うと突吉羅である」と制せられた。……そのとき釈尊は迦毘羅衛国より人間を遊行されながら、舎衛国の祇樹給孤独園に住された。このとき舎衛国は波斯匿が王であった。ときに摩竭提国、鬱禅尼城、憍賞彌、迦毘羅衛、舎衛国の諸外道がみな波斯匿王のもとにやって来て、「沙門瞿曇が自ら『阿羅漢である』と言うが、私たちも阿羅漢である。沙門瞿曇と神力を競い合いたい」と申し出た。そこで波斯匿王は釈尊のもとを訪ね、これを告げた。釈尊は15日間にわたり種々の神力を示されて人々を教化された。『四分律』「雑健度」（大正22 p.946中）
- 〈9〉離車たちは牛頭栴檀の鉢を得たので高いところに掲げて取れる者があったら取れと言った。そのとき四大声聞である迦葉・目連・阿那律・賓頭盧が、王舎城において仏教を信じない跋提長者とその姉に信じさせるために、神通を示した。そこで世尊は「神通を示すものは突吉羅」と制せられた。『五分律』「雑法」（大正22 p.170上）
- 〈10〉世尊は王舎城におられた。そのとき樹提居士が栴檀で鉢を作り、高いところに掲げて神通力ある者は取れと言った。そのとき外道六師、プーラナ・カッサパ、マッカリ・ゴーサーラ、アジタ・ケーサカンバラ、パクダ・カッチャーヤナ、サンジャヤ、ニガンタがいたが、取れなかった。そのとき目連は賓頭盧頗羅墮は師子吼第一であるのであるからこれを取れというので、賓頭盧頗羅墮が鉢をとった。世尊は在家人の前で神通力を使うなど叱られ、賓頭盧を生涯擯斥した。そこで賓頭盧は瞿耶尼（西牛貨洲）に行き、仏法を広めた。『十誦律』「雑法」（大正23 p.268下～269中）
- 〈11〉世尊は王舎城の竹園迦蘭陀所に住されていた。長者樹提が牛頭栴檀を手に入れ鉢を作ってはるか高いところに置いて、取れる者はこれを取れと言った。富蘭迦葉、摩訶離瞿耶樓、阿夷湍、波休迦栴、先毘盧持、尼鍵弗らがこれを試みたが取れなかった。賓頭盧は目鍵連のところに行って、「あなたは世尊が声聞中で神足第一と褒められたのだからあなたが取れ」といった。目鍵連は木鉢のために神足は現さないと答えたので、賓頭盧が神通力を現してこれを取った。世尊は「賓頭盧よ、私は今汝を擯する。終身般泥洹を得てはならない、閻浮提に住してはならない」と叱られた。『鼻奈耶』（大正24 p.877中）
- 〈12〉その時世尊は王舎城の迦蘭陀竹園に住されていた。釈尊は比丘らと共に托鉢のため王舎城に行かれた帰りに、城門で闍那童子と毘闍那童子に会われた。そのとき釈尊の姿を見かけた闍那は麥麴を供養しようと細かな砂を鉢のなかに捧げ、毘闍那は合掌随喜した。闍那はそのときこの功德によって閻浮提の王となり、諸仏を供養したいという願をかけた。釈尊はこれを見て微笑を浮かべられたので、阿難は釈尊に「なぜ微笑みを発せられたか」と質問した。釈尊はこの童子が、仏滅100年後に巴連弗において轉輪聖王となって統治する阿育王となり、八万四千の法塔を作ることを予言された。……（阿育王の世になり）阿育王は如来の誕生処、初轉法輪処、入滅処、舎利弗の塔などを巡行して、菩提樹のところに至った。そのとき低舎羅絺多という王の夫人が自分から王の愛が離れたと考えて、樹が枯れるように呪文をかけさせたので、樹が枯れ

ようとした。しかしそれが誤解であったことが分かったので、冷乳をかけて樹を甦らせた。王は喜んで30万の比丘を招待して供養したが、上座が空いているので訳を質すと、仏と会ったことのある賓頭盧を待っているのだという。やがて頭髮が真っ白で、辟支仏のような賓頭盧が現れたので、王は仏とどこで会ったのかと質問した。賓頭盧は如来が五百阿羅漢を率いて初めて王舎城に雨安居されたときにその中にあったこと、如来が舎衛国において神通力を示されたときにこれを見たこと、如来が母のために天上において説法され、そして僧迦奢国に下られたときにそのなかにいたこと、また世尊が舎衛国におられたとき、給孤独長者の娘がたまたま富樓那跋陀那国にあって、仏および比丘僧を招待したとき、比丘らは空に乗じていくのに、自分は大山を合してその招待の場所に行ったので、世尊はこれを責められ、涅槃をとらずに正法を護持して滅することなかれと叱られたこと、二童子が沙土に戯れ、仏滅度の後100年に巴連弗で阿育王として王位を継ぐと予言されたこと、などを話した。『雑阿含』604（大正02 p.161中～170上）

〈13〉 仏は舎衛国祇樹給孤独園におられた。その時分陂壇（*Puṇḍavardhana*）という名の難国王がいて、仏法を信ぜず外道を好み、毎日宮中において万余人の諸尼鍵に飯を供した。難国王は太子のために嫁を探させ、阿難邠埇（給孤独）の女三摩竭（*Cūlasubbhaddā*）をもらい受けた。三摩竭は宮中で諸尼鍵が裸形で食事するのを見て、大いに驚き狗畜生と異ならずとして部屋に入り、出てこなくなった。難国王は三摩竭より「舎衛国では人民が奉仕するのは仏である」と聞き仏に会いたいと言った。三摩竭が高台に上り舎衛国に向かって焼香すると、仏は感応され阿難、目連に翌朝難国へ向かうよう命ぜられた。そのとき賓頭盧は山上に坐して針で衣を繕っており、遅れて鍼を地にさしたまま神足をもって飛行して難国に至ったので、山もその後に繋がって来た。これを見た女がびっくりして、懐胎していた子を流産してしまった。仏は期を失し、一人の命を殺してしまったと叱られて、あなたは今後、我が食に随い、衆会と共にあってはならない、また彌勒が出現するまで世に留まり、般泥洹してはならないと命じられた。『三摩竭経』（大正02 p.843上～845上）

〈14〉 釈尊は500人の比丘たちとともに祇樹給孤独園に居られた。ときに阿難は釈尊に「将来、弥勒仏が出現されたときのことを教えて下さい」と質問した。そこで釈尊は弥勒仏生誕の因縁を語られたのち、摩訶迦葉に「私も年老いて80歳に向う。しかし汝ら四大声聞（大迦葉、君屠鉢漢、賓頭盧、羅云）⁽¹⁾は般涅槃しないで、弥勒仏が世に出現されるまで待つように」と告げられ、「弥勒仏が『十想（①無常の想、②楽有苦想、③計我無我想、④実有空想、⑤色変の想、⑥青瘀の想、⑦腹脹の想、⑧食不消想、⑨血想、⑩一切世間不可楽想）を思惟すべきである。これは過去の釈尊仏が汝らに有漏を尽させ、心解脱を得させるためであった』と説くであろう」と予言された。『増一阿含』048-003（大正02 p.787下～789中）

(1) 四大声聞にはこの外に次の用例がある。『増一阿含』028-001（大正02 p.646下）に目連・迦葉・阿那律・賓頭盧、『五分律』「雑法」（大正22 p.170上）に迦葉・目連・阿那律・賓頭盧とする。

〈15〉 世尊はコーサンビーにおられた。王優陀延は賓頭盧の親しい知識であったので、毎

朝訊問した。そのとき不信樂の婆羅門大臣があつて、賓頭盧が立って迎えないことをなじり、もし立って迎えないなら命を奪えと入れ智慧した。賓頭盧はその心を知って、もし立って迎えないければ自分を殺し、王は地獄に落ちるだろう、しかし立って迎えば位を失うだろうと予知し、立って迎え、このわけを話した。四分律「雜犍度」（大正 22 p.961 中）⁽¹⁾

(1) これはウデーナ王資料として紹介したものの再録である。

〈16〉そのとき世尊は賓頭盧に八種の鉢（金・銀・瑠璃・摩尼珠・銅・白鐵・木・石）を禁止された。優波離が壊れたときの修理法を尋ねた。十誦律「雜法」（大正 23 p.269 中）

〈17〉釈尊は 500 人の比丘らとともに迦蘭陀竹園に住された。このとき王舎城に多くの財宝を所有するが慳貪で信仰心なく、邪見を抱く跋提長者と姉の難陀が住んでいた。跋提は阿那律と迦葉と目連に教化されて優婆塞に、姉は賓頭盧に教化されて優婆夷となった。それを知った 2 人の弟である優婆迦尼長者は釈尊のもとを訪れ、直接釈尊から兄と姉が帰依したことを聞いた。この後、知友である阿闍世王のもとへ行った。このとき王から飯食を出されたが、釈尊の教えに触れるかどうかと、使者を出して釈尊に確かめた。釈尊は使者に「若し親近して食を得る時に、善法増益して不善法を損せば、この食は親近すべし」と、また優婆塞の守るべき法が五戒であることを説かれた。さらに比丘らに、優婆塞に五戒三帰を授けることを許された⁽¹⁾。『増一阿含』028-001（大正 02 p.646 下～650 上）

(1) 『今昔物語集（天竺部）』の巻 3 第 23 話にも採録されている。

[1-2] A 文献資料のピンドーラについての情報を整理すると次のようになる。

まず第 1 は、自ら阿羅漢果を得たと宣言したこと（資料〈1〉）である。

第 2 は、声聞比丘中の師子吼第一ないしは降伏外道履行正法とされることであるが（資料〈2〉〈3〉〈4〉）、このように評されるのは、次に紹介する B 文献資料によれば、自ら阿羅漢果を得たと宣言したことがその理由となっていることが分かる。なお註記したように、ピンドーラはアンニャコンダンニャ、舍利弗、目犍連、摩訶迦葉、アヌルッダ、マハー・カッチャーナ、阿難などと並記されているから、『維摩經』弟子品にある 10 大弟子には含まれないが、彼らに匹敵するような釈尊の重要な弟子であったという認識があったことがわかる。またこれからは彼が釈尊の布教活動のかなり早い時期に弟子になったということも推測させる。

第 3 は、ピンドーラが阿蘭若住者もしくは厳格な修行者であるとされること（資料〈5〉〈6〉）であり、資料〈12〉で彼が辟支仏のような格好で現れたというのもこのイメージを表したものであろう。

第 4 は、ピンドーラが神通力を使って釈尊に叱責されたこと（資料〈7〉〈8〉〈9〉〈10〉〈11〉）であって、これはパ・漢の原始聖典に共通するきわめて高い資料水準のものである。なお舞台はすべての資料が王舎城でのこととし、〈9〉は迦葉・目連・阿那律と行動を共にしていたとしているけれども、〈7〉〈8〉〈10〉〈11〉のすべては目連と行動を共にしていたとするから、この方が古い伝承であろう。ここからはピンドーラと目連の密接な人間関係を推測せしめる。

第5は、ピンドーラが涅槃を取らずに後の世にまで生存したことであって（資料〈12〉〈13〉〈14〉）、この伝承もA文献においてすでに形成されていたようである。ただしいずれもそれほど古い成立にかかる文献ではない。なお〈12〉には「賓頭盧は如来が五百阿羅漢を率いて初めて王舎城に雨安居されたときにその中にあった」としており、これは三迦葉の弟子たちや、あるいは舍利弗・目連の仲間の中にピンドーラがいたことをイメージしているのであろう。なおピンドーラが涅槃を取るなと命じられたのは、ピンドーラの過失を釈尊が叱責されたからであって、この点では第4の事績に共通するわけである。

第6は、ピンドーラはウデーナに師事されていたこと（資料〈15〉）であって、すでにウデーナ王資料を紹介したときに触れた。

第7は、ピンドーラを因縁として持つてはならない鉢の種類が定められたということであって（資料〈16〉）、神通力を示したのも鉢であるから、ピンドーラには鉢に繋がるイメージが持たれていたようである。

なお資料〈17〉からは特段の情報を汲み取ることができない。

[2] 次にピンドーラ・バーラドヴァージャについてのB文献資料を紹介し、若干の整理を試みよう。

[2-1] 以下がピンドーラに関するB文献資料である。

〈1〉 ピンドーラは財衰えた婆羅門（*parijijña-bhoga brāhmaṇa*）であった。比丘サンガが尊敬されているのを見て、食べ物のために（*piṇḍatthāya*）出家した。彼は大食漢（*mahallaka*）で、大きな鉢（*kapālapatta*）を持って遊行し、大きな鉢いっぱいの粥を飲み、大きな鉢いっぱいの団子を食べ、大きな鉢いっぱいの食事をした⁽¹⁾。世尊が鉢の袋（*patta-tthavika*）を禁止され、後に鉢を壊したので鉢の袋を許された契機を作ったのもピンドーラであった。上座は後に根を修習して阿羅漢果に達した。このように食べ物（*piṇḍa*）のために出家したのでピンドーラ（*Piṇḍola*）と呼ばれ、姓によってバーラドヴァージャ（*Bhāradvāja*）であり、これらを一つにして *Piṇḍolabhāradvāja* と呼ばれる。SN.-A. (vol. II pp.393~396)

(1) ‘mahallaka’を「大食漢」、‘kapālapatta’を「大きな鉢」としたのは、「仏教説話大系」第3巻 p.008の大塚憲氏の訳を参照させていただいたものである。以下同じ。

〈2〉彼は阿羅漢果に達したその日に鉢をもって精舎から精舎へ、僧房から僧房へと「道の果報に疑問がある者は私に質問せよ」と師子吼しながら歩き回り、ブッダの前にも立って、「尊者よこの教えにおいてなされるべきものはなし終わった」と師子吼した。これによって師子吼第一という名称が生じた。

彼はパドゥムッタラ（*Padumuttara*）世尊の時獅子であったが善をなして、この仏の時に王舎城の有名なバーラドヴァージャという名の婆羅門の家系に生まれた（*Rājagahe brāhmaṇamahāsālakule nibbatti*）。長じるに及んで三ヴェーダを修得し、500人の婆羅門の若者たちに真言（*manta*）を教えて生活した。彼は十分な施食を受けていたが満足せず、若者たちと行くところ行くところで食べ物（*piṇḍa*）を求め歩いたのでピンドーラ・バーラドヴァージャと呼ばれた。

彼はある日、世尊の説法を聞いて信心を得て出家し、観を修して阿羅漢果を得た。

阿羅漢果を得た時、鍵をもって精舎から精舎へ、僧房から僧房へと「道の果報に疑問がある者は私に質問せよ」と師子吼しながら歩き回った。

彼はある日、王舎城の長者の高く掲げた栴檀香木の鉢を神通力によって取って、精舎に持って帰り如来の手に置いた。世尊は知りながら、「あなたはこれをどこで手に入れたのか」と問われた。彼は一部始終を話した。世尊は「在家者に常人を超えた神通力を見せてはならない」と定められた。時に世尊は比丘サンガのなかで法を説かれた。「師子吼上座は阿羅漢果を得た日に、道の果報に疑問がある者は私に質問せよと説き、ブッダの面前で自分が阿羅漢になったことを説き、多くの人々に信心を生じさせようとして虚空に上って栴檀香の鉢を取った。念根と定根と慧根の修習によってバーラドヴァージャは生つき、梵行を完成し、なすべきことをなし終わり、再びこの生に戻ってこないと知る者と記別される」と。AN-A. (vol. I pp.196~199)

〈3〉ピンドーラ・バーラドヴァージャというのは、食べ物 (piṇḍa) を求めて出家したからピンドーラである。財衰えた婆羅門であったので、比丘サンガが大きな尊敬を得ているのを見て、食べ物のために出家したのである。彼は大きな鉢 (kapālapatta) を持って遊行し、大きな鉢いっぱい粥を飲み、食べ物を食べ、団子を食べた。彼は贅沢な性質であることを世尊に話した。世尊が鉢の袋 (patta-tthavika) を禁止され、鉢を壊したので鉢の袋を許された契機を作ったのもピンドーラであった。上座は後に根を修習して阿羅漢果に達した。このように彼は以前、財を求め、食のために遊行したのでピンドーラであり、姓 (gotta) と一つにして Piṇḍolabhāradvāja と呼ばれた。Udāna-A. (p.252)

〈4〉(Theragāthā 第 123、124 偈の註釈) ピンドーラ・バーラドヴァージャはパドゥムッタラ (Padumuttara) 世尊の時に獅子であったが、布施の功德によって私たちの世尊の時にコーサンビーのウデーナ王のバーラドヴァージャという名の宮廷司祭の子として生まれた (Kosambiyam rañño Udenassa purohita-putto hutvā nibbatti)。長じるに及んで三ヴェーダを修得し、500 人の婆羅門の若者たちに真言 (manta) を教えつつも、贅沢な性質によって不適切な行いをして、故郷を捨てて王舎城に行き、世尊の比丘サンガが尊敬を得ているのを見て出家した。はじめ食において適量を知らなかったが、世尊の教え (upāya) によって量を知る者となり、観を確立して、久しからずして六神通を得た。後に彼は世尊の面前で、「声聞弟子によってなされるべきことはすべてなされた」「道の果報に疑問がある者は私に質問せよ」と師子吼したので、世尊は「私の声聞比丘の中で師子吼第一はピンドーラ・バーラドヴァージャである」とされた。

彼はある日、自分の近くにやって来た慳貪で邪見を持つ婆羅門を憐れんで施論 (dānakathā) を説いたが、1 食だけ布施しましょうと言うので、それを私にではなくサンガにするよう勧めた。婆羅門は「彼は私に多くの人に布施させたい思っている」と不満で、翌日舎利弗 (Dhammasenāpati) のところに行った。舎利弗はサンガに布施することは大いなる果報があると説いて信仰心を持たせようとしたが、この婆羅門は「食欲から私に布施を勧めている」と考えた。Theragāthā-A. (vol. II pp.004~005)

〈5〉（ビンドーラ・バーラドヴァージャのアパダーナ）パドウムッタラ仏がかの雪山の
前にあるティッタクータに住んでおられた時、自分はそこで四足の無畏なる姿の獣王
であった。我が吼える声を耳にして多くの人々はみな驚いた。美しく咲いた蓮を採り、
仏に近づいて敬意を表した。私は四の方位に南無し、仏に南無し、自分の心を浄化し
て私は獅子吼をなした。パドウムッタラ仏は次の偈を説かれた。「……今より十万劫
の後オッカーカ族に生まれ出て、姓をゴータマと呼ばれる尊師が世に出よう。……」。
四つの無解解と八つの解脱と六神通を私は証し、仏の教えを私は行じた。 *Apadāna*
03-01-008 (p.050)

〈6〉大迦葉波、舍利子、大目連、善妙（*Sundarananda* ?）、妙意（*Sumana*）、俱胝
（*Śroṇavimśatikoṭi*）、妙音（*Ghoṣa*）が自業を説いた後、苾芻らは賓頭盧が自業を説
くことを求めた。そこで賓頭盧は、「私は前世においては貴家に生まれながら慳貪で、
父母姉妹兄弟にも食を与えず、瓦石を食えと言った。そこで地獄に堕ち、人間に生ま
れてからも、瓦石を食い、飲食を得ても満足しなかった。そして最後身では出家して
阿羅漢を得、世尊は私を師子吼において第一と記して下さった。しかし過去の業は滅
びないので、今も常に瓦石を食している」と。続いて善来（*Svāgata*）、有喜（*Nanda*）、
名称（*Yaśas*）、財益（*Śrīvarḍha*）、薄俱羅（*Bākula*）、尊者（*Mahāsthavira*）、優
樓頻螺迦葉（*Uruvelakāśyapa*）・那提迦葉（*Nadikāśyapa*）・伽耶迦葉
（*Gayākāśyapa*）、名称、火生、護国、娑底、膝多迦掇波、周離槃陀迦、蛇僕、阿泥
盧駄、師子王迦羅、羅怛羅、難陀、実力子、近将、賢子、賢塩、蜜性、因縁、橋陳如、
鄢波離、奎宿が自業を説いた。『根本有部律』「業事」（大正 24 p.078 上～094 上）

〈7〉大迦葉品、舍利弗品、摩訶目犍連品、輪提陀（*Śobhita*）品、須鬘（*Sumana*）品、
輪論（*Srona-vimśatikoṭi*）品、凡耆（*Vaṅgīsa*）品に続いて賓頭盧品があり、次のよう
な内容である。私は父母の子中の尊として生まれたが、慳貪で父母にも食を与えなかつ
た。そこで地獄に堕ちて苦しんだ後、人に生まれて滅度を得た。しかし神足で飛行し
て坎窟中に入って食を得た。そして、貨竭（*Svāgata*）品、難陀品、夜耶（*Yaśas*）品、
尸離羅（*Śrīra*？）品、薄拘盧（*Dvākula*）品、……と続く。『仏五百弟子自説本起經』
（大正 04 p.192 中）

〈8〉仏は舍衛国祇樹給孤独園におられた。その時国内に婆羅門賓頭盧埵闍がおり、貧困
であった。その婦は醜惡で男子なく七人の娘がいた。婦は性惡で恒に夫を罵っており、
娘たちも交互にやって来て要求ばかりした。彼は疲れ果て、たまたま林中で如来が樹
下に坐しておられるのに出会って出家を願った。仏は「善来」と出家させ、彼はその
場で阿羅漢となった。そして阿難の質問に対し過去世の檀膩鞞の物語を語られた。
『賢愚經』（大正 04 p.427 下～428 上）

〈9〉ある時王舍城の一長者がガンジス河で栴檀香木を手に入れた。彼に「世に阿羅漢を
自称する者は沢山いるが自分はまだ会ったことがない、この材木で鉢を作り、竹竿で
空中に掲げ、『この世に阿羅漢がいるならば空中を飛んでこの鉢を取れ、さすれば自
分も息子も妻も彼の弟子になろう』と宣言しよう」との考えが生じた。六師は「自分
たちによこせ」と言ったが、長者は「空中を飛んで自分で鉢を取れ」と応えた。この
話を聞いて目連がビンドーラに言った、「話をきいたか、まるで仏の教えに挑戦して

いるようだ、きみは神通力をもっているから空中を飛んでこの鉢を取れ」と。ピンドーラは「目連よ、あなたこそ神通第一として知られている、あなたが鉢を取れ、もしあなたが鉢を取れば私も取ろう」と言ったが、目連は「きみが行け」と言った。そこでピンドーラは超能力の状態に入り、3 由旬の大石を持ち上げて王舎城の上空を7 周した。驚愕した長者は鉢を下ろし4 種の好食を満たしてピンドーラに差し出した。この奇跡を見なかった人々の要望に対し、後に彼はこの奇跡を再現した。阿難からこの話を聞いた世尊はピンドーラを叱り、神通を開示することを禁ずる戒を定められた。

Dhammapada-A. (vol.III p.199, Burlingame 訳 vol.III p.035)

〈10〉 ピンドーラ・バラドヴァージャが神通力で王舎城の商人のところから栴檀の鉢をもらってきたとき、世尊は比丘が神通力を使うことを禁止された。しかし諸仏には禁戒はないということで、世尊はビンピサーラ王の要請で舎衛城のガンダ菴羅樹の下で奇跡を行った。それから世尊は三十三天にのぼり雨期3ヶ月の間神々にアビダンマを説かれた。雨安居を過ごされた後、舍利弗が雨安居を過ごしたサンカッサに降りられ、舍利弗と問答された。そして舎衛城に行かれた。*Jātaka 483 Sarabhamiga-j.* (vol.IV p.263)

〈11〉 王舎城中に大長者があり、栴檀鉢を作って高いところに置き、これを取ったら与えると言った。富蘭那迦葉をはじめとする六師が試みたが成功しなかった。賓頭盧は目連に、「あなたは佛弟子中神通第一でよく師子吼するものであるから、これを取れ」と言った。目連は断り、賓頭盧に「あなたも大阿羅漢で神通第一でよく師子吼するものであるから、これを取れ」といった。そこで賓頭盧は神力を現してこれを取った。世尊はこれを叱った。『毘尼母經』（大正24 p.826 中）

〈12〉 アショーカ王は枯れかかっていた菩提樹が元気になったので、サンガを招待して五年法会を行った。続々と比丘が集まったが、最上座の席が空席のままになっているので訳を尋ねて、仏に「師子吼する者の第一」と宣言されたピンドーラ・バラドヴァージャがまだ来ていないことを聞いて、「仏とじかに会った比丘がまだ生きているのか」と驚き、喜んだ。やがて白髪混じりの頭をした、目の上に眉の垂れ下がったピンドーラ・バラドヴァージャが空から舞い降りた。そして本当に仏にお会いになったのですかという王の問いに、悪魔を退治された世尊が500人の阿羅漢とともに王舎城に安居されたときに一緒であったこと、世尊が舎衛城で外道たちのために神変を示されたときにもその場にいたこと、世尊が三十三天で安居に入られて生母に説法され、サーンカーシュヤに降られたときにもその場にいたこと、世尊が給孤独長者の娘のスマーガダーに招待されたとき、自分は神力で山を掴んでは空を飛んでブンダヴァルダナに行き、そのとき「お前は法が滅しないかぎり般涅槃してはならぬ」と命じられたこと、前世で子どもであったアショーカ王が麦こがしをさし上げようと一握りの土を鉢に入れたとき、世尊が「私が般涅槃して100年後に、この子はパータリプトラ城でアショーカと呼ばれる王になるであろう」と予言されたときにも同じ場所にいたこと、を話した。このようにして五年法会が終わったとき、王は八万四千の塔を建立した。

Divyāvadāna (pp.399~404, 平岡訳 pp.128~133)

〈13〉 阿育王は枯れ死にしかかっていた菩提樹が元気になったので、四方僧を招いて供養

をした。そのとき無数の比丘が集まったが第1座は無人であった。その理由を耶舎に聞くと、仏から弟子中師子吼すること第一と説かれた姓をバーラドヴァージャ（頗羅墮）、名をビンドーラ（賓頭盧）という比丘が来るのだと言う。王は実際に仏を見た者が未だ生存しているのかと驚いた。やがて頭髪が真っ白で、眉毛が顔を覆うように垂れ下がった賓頭盧が空からやって来たので、五体投地して挨拶し、本当に仏に会ったのかと質問した。賓頭盧は世尊が500人の阿羅漢と最初に王舎城で安居したときにその中にいたこと、世尊が舎衛国において外道に神力を見せたときにもそこにいたこと、世尊が三十三天で安居されて母のために説法し、僧柯奢国に下りられたときもそこにいたこと、修摩伽陀（修摩陀伽ともする）女兒の招待に、仏が500人の阿羅漢とともに神力で空を飛んで分陀跋陀国に行ったときも一緒であったが、自分は神力をもって山を挙げて虚空中を行ったので、仏は誡勅されて、「あなたは涅槃に入ってはならない」といわれたこと、昔のことであるが子どもであった大王が仏に麦焦がしをさし上げる心で沙をさしあげたとき、「この小児は私の般涅槃の100年後に波吒利城に生まれて、阿輪柯と名づける転輪王になり、八万四千の法王塔を起す」と予言されたときもそこにいたこと、などを話した。その時阿育王は仏法に大信心を生じ、八万四千の塔を起して、五衆大会を行った。『阿育王経』巻3（大正50 pp.139上～141中）

〈14〉阿育王は三十万僧を請じた。十万僧は阿羅漢、二十万僧は須陀洹・斯陀含・阿那含で、清浄の凡夫も皆座に就いたが、最上座の席に坐す者がいなかったのので、王が何故空席なのか問うたところ、さらに上座の人の坐す処と答えた。王が夜舎に「汝より上座がいるのか」と問うと、夜舎は「昔、仏が師子吼第一と記された賓頭盧跋羅豆婆闍を尊重する」と答えた。また「如来を見ることができた者がいるかどうか」との問いに、夜舎は「賓頭盧阿羅漢が見ている」と答えた。王が「お会いできるか」というと、「今まさに来られるでしょう」と答えた。王が合掌して待っていると、賓頭盧が空中から下りてきて上座に坐した。見ると頭白く眉秀で身体相好は辟尸仏のようで、王は五体投地の礼をし、「如来に会いましたか」と尊者に問うた。また何処で会ったかとの問いに、賓頭盧は「仏が五百阿羅漢等と王舎城にて夏安居された時に私もその中にいた。また舎衛国にて大神変を現し外道を摧かれた時、また阿迦膩吒天に昇られた時、忉利天にて母の為に説法し諸天に囲堯され僧伽戸沙池側に来下された時、蓮花比丘尼が転輪聖王に化作し千人の子を具足して仏足を礼した時もその中にいた」と答えた。

『阿育王傳』（大正50 p.105上～下）

〈15〉我れ世を去りて後、摩訶迦葉・賓頭盧・君徒般歎・羅睺羅の四大比丘は住して泥洹せず、我法を流通す。『舍利弗問経』（大正24 p.902上）

〈16〉仏薄伽梵が般涅槃されて800年、師子国勝軍王の都に難提蜜多羅（唐言、慶友）という名の阿羅漢がいた。ある時、比丘たちの「釈迦牟尼の無上正法は何時まで続くのか」との問いに答えた。「如来は先に法住経を説かれている。仏薄伽梵が般涅槃された時、無上法を以って十六大阿羅漢並眷属等に付嘱し、其れを護持し滅没しないようにされた」と。諸大衆は「自分たちはその十六大阿羅漢の名を知らない」というと、慶友は答えて言った、「第一尊者の名は賓度羅跋囉惰闍、第二尊者の名は迦諾迦伐蹉、…第十尊者の名は半託迦、第十一尊者の名は囉怛羅、…第十六尊者の名は注荼半託迦、

これらの十六大阿羅漢は一切皆三明六通八解脱等無量功德を具えている」と。『大阿羅漢難提蜜多羅所說法住記』（大正 49 p.012 下）

〈17〉四天下をもって言えば、唯だ三天下すなわち閻浮提・瞿耶尼・弗婆提と三天下の中間の海洲上の人は一切得戒す。瞿耶尼の如きは仏は賓頭盧を遣わし、往きて彼れ大いに仏事を作り、四部衆あり。東方にもまた比丘あり、……。『薩婆多毘尼毘婆沙』（大正 23 p.509 下）

〈18〉富那奇羅漢は兄の羨那に僧を食事に招待することを勧めた。それを受けて阿難は籌を行って神足のある比丘を順々に送った。第一の上首である橋陳如、頭陀を行ずる摩訶迦葉、広博大智の舍利弗、神足第一の大目連、天眼第一の阿那律、徳行純備の難陀、解空第一の須菩提、弁才応適第一の分耨文陀尼子、持戒第一の優波離、精進第一の二十億、端正第一の大劫賓寧、坐禅第一の賓頭盧埵闍、仏の子の羅睺羅である。『賢愚経』（大正 04 p.395 上～396 中）

〈19〉天竺国に優婆塞の国王長者があり、一切会を設けるとときには常に賓頭盧頗羅墮誓阿羅を請じて、末法四部衆の福田としていた。請ずる時には静処において焼香礼拝し、天竺摩梨山に向かって至心に称名して、「大徳賓頭盧頗羅墮誓、受仏教勅為末法人作福田、願受我請。……」と唱えていた。『請賓頭盧法』（大正 32 p.784 中）

〈20〉長老ピンドーラ・バーラドヴァージャによってよく説かれた。「正観者は身の実相を見て考え、唯一人伴なく、所縁の真ん中に臥す」と。*Milindapañha* (p.398)

〈21〉長老ピンドーラ・バーラドヴァージャによってよく説かれた。「地獄における恐れ戦慄、涅槃における広大なる楽、この二つの利を瑜伽者は示すべきである」と。*Milindapañha* (p.404)

[2-2] ピンドーラ・バーラドヴァージャの場合、B 文献資料が A 文献資料に付け加える情報はほとんどない。強いてあげれば、

- (1) 師子吼第一と言われる所以が詳細に語られることー資料 〈2〉 〈4〉 〈5〉
- (2) ピンドーラの前世は獅子であって、衰退したバーラドヴァージャを姓とする婆羅門の家に生まれたことー資料 〈1〉 〈2〉 〈3〉 〈4〉 〈5〉
- (3) ピンドーラはもとは大食漢であり、慳貪であって、食（ピンダ）のために出家したのでピンドーラと呼ばれることー資料 〈2〉 〈3〉 〈4〉 〈6〉
- (4) ピンドーラの出身地が語られること。ただし資料 〈2〉 は王舎城とし、資料 〈4〉 はコーサンピーとするので一致しない。なおウデーナ王資料の中に紹介した【3】の [2-2] の 〈9〉 ではウデーナ王の輔相の子であるとする。

であり、阿羅漢果を得たこと（資料 〈1〉 〈3〉）、神通力で鉢を取って釈尊に叱責されたこと（資料 〈2〉 〈9〉 〈10〉 〈11〉）、その時目連と一緒にであったこと（資料 〈9〉 〈11〉）、釈尊が初めて王舎城で雨安居されたとき一緒に過ごした 500 人の比丘の中にいたこと（資料 〈12〉 〈13〉 〈14〉）、釈尊に叱責されて般涅槃するなと命じられたこと（資料 〈12〉 〈13〉 〈15〉 〈16〉）、鉢に関する規定制定の因縁になったこと（資料 〈3〉）、などは A 文献から継承された情報である。

また以上の資料には含めなかったが、前節の [2-2] で紹介した 〈4〉 〈5〉 〈6〉 〈7〉 〈8〉 〈9〉 などからわかる通り、ピンドーラはウデーナ王と関係が深く、その帰信に係わり

があるとされていることも注意しておかなければならない。

〔3〕以上の A、B 文献の情報をもとにピンドーラ・バーラドヴァージャについての人物像と、もし可能なら釈尊の生涯と教団形成史との係わりを考察してみよう。

〔3-1〕まずピンドーラ・バーラドヴァージャの出自である。B 文献によれば婆羅門出身であるとしているが、バーラドヴァージャという姓から彼が婆羅門出身であったことは確かであろう。なお B 文献であるが、生まれた場所を〈2〉は王舎城とし、〈4〉はコーサンビーとしているが、後にも述べるように出家の時期や主たる活動地などを勘案すると、前者の方が正しいように思われる。とにかくピンドーラがコーサンビー出身であるから、ウデーナ王とも因縁ができたということではなさそうである。

〔3-2〕そしてこれも B 文献であるが、彼は食のために出家したのでピンドーラという呼び名が付けられたとする。そしてこれももちろん B 文献であるが、出家の場所を〈4〉は王舎城とし、A 文献の〈12〉と B 文献の〈12〉〈13〉〈14〉は釈尊が最初の雨安居を 500 人の阿羅漢たちと王舎城で過ごされたときその中にいたとする。釈尊とともに行動する比丘の人数は 1,250 人とされることが多く、これは三迦葉の 1,000 人の弟子たちと、舍利弗・目連の仲間 250 人をさすが、しかし釈尊とともに行動する比丘を阿羅漢とする場合の人数は 500 人とされることが多く、この場合はこれにしたがったのであろう。また成道後最初の王舎城の雨安居というのであるから、おそらく三迦葉と舍利弗・目連の弟子・仲間たちがイメージされていたのであろう。そしてその中にピンドーラもいたというなら、彼は三迦葉の弟子か舍利弗・目連の仲間たちの一員であったということになる。またピンドーラを師子吼第一とする A 文献において彼が舍利弗や目連とならべられることから、かなり早い時期に出家したと考えられる。

また梅檀の鉢をとった場所を A 文献の〈7〉〈8〉〈9〉〈10〉〈11〉と B 文献の〈9〉〈10〉〈11〉すべてが王舎城とするから、ピンドーラの主たる活動地は王舎城であったのであろう。またこのエピソードとともに登場する人物は目連であって、目連とするのはあるいは彼が神足第一とされるからかも知れないが、しかし後に改めて検討するようにピンドーラは舍利弗・目連と関係が深いようであるから、ピンドーラは舍利弗・目連の仲間であったのではないかと思われる。

このようにピンドーラの活動場所は王舎城が多く、舍利弗・目連もその近くの出身で、そもそも王舎城近辺で活動していたのであるから、ピンドーラの出身はコーサンビーではなく王舎城近辺であったのであろう。上述した〈4〉は彼の出身地をコーサンビーとし、資料があまりに拡散しすぎるので上記資料の中には含めなかったけれども、『寶頭盧突羅闍爲優陀延王說法經』が「信樂三宝出家学道、得具足果遊行教化、還拘舍弥城欲度親党」（大正 32 p.785 上）とするのは信じがたい。

〔3-3〕それではピンドーラはウデーナ王といつ、どのようにして会うことになったのであろうか。ウデーナ王資料において紹介した B 文献によれば、彼が食事の後ウデーナ王の園林に涼みに来ていたときのこととされているが、〈5〉も〈6〉もそしておそらく〈4〉も、ピンドーラは舍衛城から空を飛んできたとされているのであるから、注釈書のイメージは彼はそのときコーサンビーに住していたのではないということになる。おそらくこれは彼がコー

サンビーの出身でもなく、したがってコーサンビーに生活の拠点をおいていたのでもないということを物語るのであろう。

したがって彼がウデーナ王とその園林で会ったとするなら、それは旅の途中のことであって、おそらく釈尊とともに遊行してきたのであろう。そして王は、ピンドーラとの邂逅の当初は、サーマーヴァティーと王との間のエピソードにおいても見られるように、仏教には無関心であったのであって、その後徐々に仏教に理解を深めていったのである。ピンドーラと王との邂逅の記述にその時期を特定させる情報は無いが、サーマーヴァティーとのエピソードは前述したように、釈尊の最初のコーサンビー訪問の時であったと考えられ、ピンドーラとウデーナ王が初めて会ったのもその時であって、その時はまだ王は仏教に帰信していなかったと考えてよさそうである。

〔3-4〕後にピンドーラが出家の声聞弟子を代表するような人物となったことは、師子吼第一・降伏外道履行正法第一・坐禅第一とされることで明らかであるが、修行者としては頭陀行を修し、神通力をよくする阿蘭若行者タイプであったのであろう。

しかしながら神通力を衆生に示して釈尊から叱責されたり、これがその他のイメージを誘発しているのかも知れないが、鉢に関するさまざまな規定の因縁を作ったとされたり、またピンドーラが後世まで生存して阿育王に会ったというのは、これも釈尊に叱責されて涅槃に入ることを禁じられたからであるとされ、そういう意味では出家する前は慳貪であって、ピンダのために出家したというエピソードを含めて、必ずしも優等生的な修行者でもなかったというイメージもあるようである。

〔4〕以上のようにピンドーラ・バーラドヴァージャは、その生まれによってコーサンビーと特別の縁を持つ人物ではなく、釈尊とともにコーサンビーを訪問しているときに、たまたまウデーナ王に会って、師弟の関係を結ぶようになったものと考えられる。王がいつ仏教に信仰を持つようになったのかは明らかではないが、少なくともピンドーラが王と初めて会ったのは、釈尊がゴーシタ長者などによって招待されて、初めてコーサンビーを訪問したときのことであったようである。したがってそれ以前にピンドーラが仏教をコーサンビーにもたらしていたという可能性は捨てられなければならない。